

On certain projective modules for finite groups of Lie type

大阪市大・理 津島行男

Yukio Tsushima

K を標数 $p > 0$ の代数的閉体とし, q を p のべきとす。

$GL(n, q) \supset G_0$ を古典的線形群

$SL(l+1, q), Sp(2l, q), \underbrace{\Omega(2l+1, q), \Omega_{\pm 1}(2l, q)}_{(直交群)}, ST(l+1, q)$
 (斜交群) (直交群) ($(2=7)$ -群)

とすると, G_0 は Steinberg module St とよばれる K 上 $|G_0|/p$ 次元の既約加群をもつ。 St は projective であり, また G_0 の複素加群に持ち上げることもできる。 $V = K^n$ を自然に G_0 -加群とみると, \cong は既約である。 Lusztig は $q \geq 3$ のとき $G_0 = GL(m, q)$ に対し, $St \otimes_K V$ が直既約 projective である \cong を示した (1974)。 その後奥山によつて \cong が $SL(l+1, q)$ と $Sp(2l, q)$ についても正しいことを示された (1984)。

\cong は \cong を上にあげた古典的線形群すべてに対して拡張する \cong を試みる。 G_0 を統一的に取り扱うためには, Chevalley gp λ は Steinberg gp と見ると都合が良い。 また表現論的には $\overline{G_0}$ universal Chevalley (又は Steinberg) gp. G におきかえてよい。 \cong は G の上にある (即ち K 上の) 半単純代数群の有理表現の G への制限として \cong の既約 G -加群が得られた。 この立場に立つて以下大雑把な方針を述べてみる。

1. 記号と準備

\mathfrak{g} を複素数体 \mathbb{C} 上の A_e, B_e, C_e, D_e type の単純 Lie 環, \mathfrak{h} をその standard Cartan subalgebra, Δ を \mathfrak{g} の \mathfrak{h} に関するルート系, Π を単純ルート系, Δ^+ を正ルート全体, W_Π を Δ の Weyl 群とする。 $\alpha \in \Delta$ に対し $h_\alpha \in \mathfrak{h}$ を α の coroot とし

$$X = \{ \mu \in \hat{\mathfrak{h}} ; \mu(h_\alpha) \in \mathbb{Z}, \forall \alpha \in \Delta \} \text{ とおく。}$$

$\mu \in X$ が dominant であるとは $\mu(h_\alpha) \geq 0$ ($\forall \alpha \in \Delta^+$) ときを言う。

$\Pi = \{\alpha_1, \dots, \alpha_r\}$ とおき $\omega_i \in X$ を $\omega_i(h_{\alpha_j}) = \delta_{ij}$ と定めると $\{\omega_1, \dots, \omega_r\}$ は X の \mathbb{Z} -basis となる。 ω_i は fundamental dominant weight とよぶ。

X^+ を dominant weights 全体の集合とする。

$$X^+ = \left\{ \sum_{i=1}^r a_i \omega_i ; a_i \in \mathbb{Z}^+ = \{0, 1, 2, \dots\} \right\}.$$

G_K^u を \mathfrak{g} による \mathbb{Z} 定義された K 上の universal Chevalley grp. とする。

$$G_K^u = \langle x_\alpha(t) ; \alpha \in \Delta, t \in K \rangle.$$

G_K^u の Frobenius endomorphism σ を次のように与える：

$$\sigma(x_\alpha(t)) = x_{\tau(\alpha)}(\varepsilon_\alpha t^\theta)$$

ここで τ は identity かつ $\forall \varepsilon_\alpha = 1$ 又は τ は A_e, D_e type の

Dynkin 図形上の order 2 の symmetry かつ $\forall \varepsilon_\alpha = \pm 1$ である。

$G = (G_K^u)^\sigma$ を σ の fixed points のなす有限群とする。最初にあげた古典群は G の central subgp. にある factor grp. となる。

G_K^u の irreducible rational modules (over K) は X^+ による \mathbb{Z}

parametrise せぬ, \mathcal{L} の代表系は $\{L(\lambda); \lambda \in X^+\}$ と表せぬ。

\Rightarrow λ は $L(\lambda)$ の highest weight である。一方 G の既約加群 (over K) 全体は $X_g = \{ \sum_{i=1}^{\ell} a_i \omega_i; 0 \leq a_i \leq g-1 \} \subset X^+$

と表せ $\{L(\lambda)'; \lambda \in X_g\}$ と表せぬ。ただし $L(\lambda)' = L(\lambda) \uparrow G$

である。例として $L(0)'$ は trivial module, $L((g-1)\rho)'$ ($\rho = \sum \omega_i$)

は Steinberg module である。一方 $G \rightarrow G_0$ を通じて $V = K^n$

を G -module とする $V = L(\omega_1)'$ である。ただし

$$\omega_1(\text{diag}(t_1, \dots, t_n)) = t_1, \quad \text{diag}(t_1, \dots, t_n) \in G_0$$

(g が Bc type の場合は $\omega_1(\text{diag}(0, t_1, \dots, t_{\ell})) = t_1$)

$$\lambda, \mu \in X, \quad \mu - \lambda = \sum r_i \alpha_i \quad (r_i \in \mathbb{Q}) \text{ と表せるとき}$$

$$\lambda \leq_{\mathbb{Q}} \mu \iff r_i \geq 0 \quad (i=1, 2, \dots, \ell)$$

$$\lambda \leq \mu \iff r_i \in \mathbb{Z}^+ \quad (i=1, 2, \dots, \ell)$$

と約束する。

また $\lambda \in X_g$ に対し $\lambda^0 = (g-1)\rho + \omega_0 \lambda$ と表せ $\lambda^0 \in X_g$ である (\Rightarrow $\omega_0 \in W_{\mathbb{R}}$ は $\omega_0 \pi = -\pi$ とする唯一の元)。

既約 G -加群 $L(\lambda)'$ ($\lambda \in X_g$) の projective cover を $\mathcal{U}(\lambda)$ と表す。

St は projective であるから $St \otimes L(\lambda)'$ も projective であり, したがって

$\{ \mathcal{U}(\mu); \mu \in X_g \}$ の直和で表せぬ。Jantzen [1]

に次の事が示す (2 De type の場合も含めた proof は津島 [3] 参照)。

Lemma 1. G is universal Chevalley gp / \mathbb{F}_2 is universal Steinberg gp of type D_ℓ ($\ell \geq 4$) とあると ($m(\lambda, \mu) \geq 0$)

$$St \otimes L(\lambda)' \simeq U(\lambda^0) \oplus \bigoplus_{\lambda' <_0 \mu} m(\lambda, \mu) U(\mu)$$

これを "1" として用い、また A_ℓ type の universal Chevalley gp: $SO(\ell+1, \mathbb{F})$ について別の考察を用いると、と角次がわかる。

Lemma 2. $G_0 = SL(\ell+1, \mathbb{F}), \Omega(2\ell+1, \mathbb{F}), Sp(2\ell, \mathbb{F}), \Omega_{\pm 1}(2\ell, \mathbb{F}), SO(\ell+1, \mathbb{F})$ に $\lambda \neq \mu$ が成り立つ。

$$(1) St \otimes V \simeq U(\mu_1^0) \oplus m_1 St \quad (m_1 \geq 0)$$

$$(2) G_0 = SL(\ell+1, \mathbb{F}), SO(\ell+1, \mathbb{F}) \text{ に } \lambda \neq \mu \text{ ならば}$$

$$St \otimes \bigwedge^k V \simeq U(\omega_k^0) \oplus m_k St \quad (m_k \geq 0, 1 \leq k \leq \ell)$$

ただし $\bigwedge^k V =$ module of skew symmetric tensors of degree k .

上記の m_k を計算する = 以下各々の別の話となる、次節でこれを述べる。

2. Levi subgroup λ の reduction

$B_K^u = \langle \alpha(t), H_K^u, \alpha \in \Delta^+, t \in K \rangle$ は G_K^u の Borel subgroup であり、

$H_K^u = \langle H_\alpha(t), \alpha \in \Delta, t \in K^* = K - \{0\} \rangle$ は G_K^u の maximal torus

を成す ($H_K^u \subset B_K^u$)。 G_K^u は $(B_K^u, N_{G_K^u}(H_K^u))$ -pair を持つ

群であり、その Weyl 群 $N_{G_K^u}(H_K^u)/H_K^u \simeq W_\Pi$ である。 Π の

τ -stable subset J に対し $\Delta_J \in J$ は基本ルート系である

ル-ト系 Σ とし, W_J を Σ の Weyl 群 とする。parabolic subgroup
 $\tilde{P}_J = B_K^\vee W_J B_K^\vee$ とおき $\tilde{L}_J = (B_K^\vee)_J W_J (B_K^\vee)_J$ を Σ の Levi subgroup
とす ($(B_K^\vee)_J = \langle \alpha_\alpha(H); \alpha \in \Delta_J, \alpha \in K \rangle H_K^\vee$)

$P_J = \tilde{P}_J^\sigma$, $L_J = \tilde{L}_J^\sigma$ とおくと L_J は split $(B_J N_J)$ -pair of
characteristic p をもつ群となり, 特に Steinberg module
 St_{L_J} をもつ。 ($B_J = (B_K^\vee)_J^\sigma$, $N_J = N_{\tilde{L}_J}^\sigma(H_K^\vee)^\sigma$)

complex character とし St は

$$St = \sum_J (-1)^{|J|/r} (1_{P_J})^G$$

である。 π は π の τ -stable subsets を動かす, $|J|/r$ は
 J の τ -軌道の個数である。 また $St|_{P_J} = (St_{L_J})^{P_J}$ であり,
 $(St, (1_B)^G) = 1$ とおき ($B = (B_K^\vee)^\sigma$)。 ψ を V の Brauer
character とおくと St の projectivity より

$$m_1 = \dim \text{Hom}_{KG} (St, St \otimes V) = (St, St \cdot \psi) \quad (\text{指標の内積}).$$

よって Frobenius の相互律より

$$m_1 = \sum_J (-1)^{|J|/r} (St_{L_J}, \psi|_{L_J})$$

となる。 以下 $m_J = (St_{L_J}, \psi|_{L_J})$ とおくと $m_J \in \mathbb{Z}$ 計
算する。 上の公式は ψ とし V の Brauer character とおくと
も同様であるから (Lemma 2 の Σ の Σ) m_K に対しても通用す
る。 G_0 の対角部分群 H の形ははっきりとわかる。 Σ の

Σ の Σ とおき $\Sigma \geq 3$ の場合 $G_0 = \Omega(2l+1, \delta)$ とおくと、 Σ の

Σ の $m_J = 0$ が容易にわかる。 Σ の Σ

Theorem 3. $g \geq 3$ とする。

$$(1) \text{St} \otimes V = \begin{cases} U(\omega_1^0) \text{ if } G_0 = SL(l+1, g), Sp(2l, g), \Omega_{\pm 1}(2l, g) \\ \text{or } SO(l+1, g) \\ U(\omega_1^0) \oplus \text{St} \text{ if } G_0 = \Omega(2l+1, g) \end{cases}$$

(2) $G_0 = SL(l+1, g)$ or $SO(l+1, g)$ のとき

$$\text{St} \otimes \bigwedge^k V = U(\omega_k^0) \quad (1 \leq k \leq l)$$

proof. (1) の前半は easy. $\Pi \supset J$ を τ -stable とする。

$m_J \neq 0 \Rightarrow \text{Hom}_{L_J}(\text{St}_{L_J}, V|_{L_J}) \neq 0$, i.e., $\text{St}_{L_J} \otimes V|_{L_J}$.

特に $V|_H$ は H -inv. な $\bar{\alpha}$ (= highest weight vector) を持つこととなるが、これは $\Omega(2l+1, g)$ 以外では不可能である。

$\Omega(2l+1, g)$ の場合、 $p=2$ ならば " $Sp(2l, g)$ と自然に同型なので"、 $p>2$ とする。このとき $V=K^n$ の first unit vector は H で fix されるので $m_\phi = 1$ である。 $J \neq \phi$ のときは highest weight vector は Borel subgroup B で fix されることはない。よって $m_J = 0$ となり、 $m_1 = 1$ が得られる。

(2) の証明は (1) ほど easy ではないが、 $\bigwedge^k V$ の weight の状態と H の作用からやはり $m_J = 0$ が之より $m_k = 0$ を得る。

3. $g=2$ の場合

この場合 $H = (H_k^4)^{\sigma} = 1$ が universal Chevalley gp. G にあって成り立つので Theorem 3 の議論は通用する。実際符号

の和 $m_1 = \sum (-1)^{|J/\pi|} m_J$ を直接計算する (= ととなり), 最終的には 2 項係数に因る 2 つの恒等式が決め手となる。結果は λ を記しておく。

Theorem 4 $SL(l+1, 2), Sp(2l, 2) \simeq \Omega(2l+1, 2), \Omega_{\pm 1}(2l, 2)$
に 対し,

$$St \otimes V \simeq U(\omega_1^0) \oplus St$$

Theorem 5 $SL(l+1, 2)$ に 対し

$$St \otimes \bigwedge^k V \simeq U(\omega_k^0) \oplus St \quad (1 \leq k \leq l)$$

Theorem 6 $SU(l+1, 2)$ に 対し $(1 \leq k \leq l)$

$$St \otimes \bigwedge^k V = \begin{cases} U(\omega_k^0) \oplus St & \text{if } l = \text{odd and } k = \frac{l+1}{2} \\ U(\omega_k^0) & \text{otherwise,} \end{cases}$$

文 献

[1] J.C. Jantzen: Representations of Chevalley groups in their own characteristics, Proc. Symposia, AMS 47, part 1 (1987), 127-146.

[2] 奥山哲郎: BN-pair をもつ有限群の p -block theory, 「群とその表現」研究集会報告集 (1984), 176-185.

[3] 津島行男: On certain projective modules for finite groups of Lie type, Osaka J. Math. (1990) vol. 27, 949-962.